

野鳥保護から築く 持続可能な社会

日本野鳥の会会長
上田恵介

1950年大阪府生まれ。理学博士。動物生態学者。立教大学名誉教授。鳥類を中心とした動植物全般の進化生態学、行動生態学を専門とする。かわら、環境問題の研究にも取り組む。野鳥や自然に関する一般書の執筆、テレビ・ラジオ出演では、柔らかく、わかりやすい解説に定評がある。1963年の小学生の頃から、日本野鳥の会会員。2015年6月に日本野鳥の会副会長に就任。2019年6月より会長に就任。



事業報告

2025(令和7)年度

B 日本野鳥の会は、日本で最も歴史のある、国内最大の自然保護NGOとして、創立以来91年間にわたり、日本の自然と野鳥の保護に積極的に取り組んできました。それもすべて、当会の活動を支えてくださる会員、サポーターの皆さまの力添えがあつてこそです。深く感謝するとともに、2025年度の活動を報告します。

新緑のバードウォッチング

今この原稿を書いているのは新緑の季節、近くの里山では、エゴノキの花が満開です。花がないとどこにあるのかわからないエゴノキですが、花が咲くと、真っ白な花が新緑のなかで存在感を主張しています。エゴノキは梅雨が近いことを知らせる季節の花です。

さて私事ですが、わたくし、昨年、後期高齢者の仲間入りをし、シニア大学の仕事からもフリーになったので、久しぶりに速出のバードウォッチングを楽しんでいます。

海洋プラスチックの問題

日本野鳥の会が、現在、重点的に取り組んでいる活動のひとつが海洋プラスチックの問題です。海洋に漂うペットボトルやポリ袋、浮きや網などの廃棄漁具は、アホウドリやウミガメなどによる誤食や絡まりの問題を抱えています。さらに深刻なのは、海洋に流れ出たプラスチックごみが紫外線などで劣化してどんどん細くなり、プランクトンと一緒に海洋生物の体内に取り込まれてしまうことです。マイクロプラスチックよりさらに微小なナノプラスチックにいたってはウイルスのサイズにまで細かくなつており、一部は魚やプランクトンの細胞にまで(ひいては私たち人間の細胞にまで)取り込まれていることがわかっています。最近の研究では、微小化したプラスチックが海面を覆うことで、植物プランクトンの光合成量を低下させ、海洋の二酸化炭素吸収量を大きく減少させていることも分かっています。当会が東京農工大学と共同で行った研究でも、オーストンウミツバメからプラスチックへの添加剤が検出されています。プラスチックごみの投棄・拡散、また焼却による熱回収は、私たちへの健康被害も含め、地球温暖化を加速する要因の一つになっているのです。

私たちの理念

鳥たちに優しい社会は、人にも優しい社会です。野鳥を保護することは、この国の豊かな自然を保護することです。それは自然界の一員でもある人間の健全な暮らしを守ることもつながっています。未来を生きる子どもたちのためにも、私たちに負わされた責任は大きいと考えています。

鳥たちに優しい社会は、人にも優しい社会です。野鳥を保護することは、この国の豊かな自然を保護することです。それは自然界の一員でもある人間の健全な暮らしを守ることもつながっています。未来を生きる子どもたちのためにも、私たちに負わされた責任は大きいと考えています。



エゴノキの花



有明海のハマシギの群れ

ホルムズ海峡とプラスチック

ところで皆さんはプラスチックが主に石油から作られていることは知っておられますね。植物由来のバイオプラスチックもありますが、プラスチックのほとんどは石油から精製したエチレンなどの分子を化学反応で多数くっつけてポリマーをつくり、これが容器や包装、そのほか私たちが生活のなかで目にするさまざまなプラスチック製品に加工されるわけです。

現在、そのプラスチックの供給不足が心配されています。なぜかというところ3月にアメリカとイスラエルがイランに対して攻撃を行い、それによって中東の石油の輸送経路であったホルムズ海峡が封鎖され、日本への石油の供給、ひいてはプラスチックの生産に大きな影響をあたえているからです。戦争が1日も早く終わって、貴重な人命

が失われることのない平和な世界を望んでいるのは当然ですが、ホルムズ海峡封鎖という今回の事態が、プラスチックにとっぴりつかった私たちの生活を見直すいい機会だと言ったら、叱られるでしょうか？

そもそも石油も石炭も、今から数億年前に地球上に生息していた生物が作り出したものです。石油は海に生息していた植物プランクトンの遺骸が深海に堆積して、さらに地殻中に取りこまれ、高温高压下で何億年もの時を経て生成されたものです。石炭も3億年前の古生代の陸上植物が地中に埋もれて、熱と圧力の元で形成されたものです。大気のなかに存在していた二酸化炭素を地中に炭素化合物として蓄積している、これらの埋蔵資源を掘り出して燃焼させ、空气中に二酸化炭素を戻していくことがつづいていくならば、地球環境はどうなっていくのか、深刻に考えざるを得ません。

上田会長が折々に綴る
トップメッセージ

2か月ごとに更新中です!
ぜひご覧ください

<https://www.wbsj.org/about-us/message/>



2025年度事業を振り返って

日本野鳥の会 理事長
遠藤 孝一



1958年生まれ。当会理事長。日本野鳥の会栃木県支部支部長、NPO法人オオタカ保護基金代表。長年、栃木県を中心に自然保護や環境教育、猛禽類の保護や研究に取り組む。現在、里山で生きものを育む農業を営みながら「サンバの里自然学校」を運営。著書に、『オオタカの生態と保全』（共編著、日本森林技術協会）、『日本のタカ学』（分担執筆、東京大学出版会）など

保護事業を積極的に展開しました。また、クロツラヘラサギに関する情報収集やマナヅル、ナベヅルの越冬地分散事業、アカコッコやオオジシギの保護活動も継続し、シマアオジの東南アジアにおける越冬調査やサシバの渡りルート解明にも協力しました。

特にチュウヒについては、北海道のサロベツ原野と勇払原野において、チュウヒの繁殖状況や生息環境の把握に努めるとともに、イギリスにあるヨーロッパチュウヒが繁殖する複数の保護区を視察訪問し、環境の創出や維持管理の手法など保護施策立案のための基礎情報を収集しました。また、風力発電や大規模太陽光発電等が、立地によっては野鳥の衝突事故や生息環境の消失につながることから、自然エネルギーの問題へも引きつづき取り組みました。環境省等による7件の各種検討委員会や衆議院環境委員会に出席し、専門的見地から意見を述べるとともに、問題のある自然エネルギー発電事業計画に対しては13件の意見書及び要望書を支部等と連名で提出しました。なお、タンチョウやチュウヒの生息に大きな影響を与えることが危惧された(仮称)「苫東厚真風力発電事業の計画については、当会や支部、地域の関係団体等との連携が実り、中止が決定しました。

海鳥への影響が懸念される海洋プラスチックごみの問題については、使い捨てプラスチックの削減や持続可能な社会の実現に向けて普及啓発するために一般向けオンラインセミナーを3回開催し1500名

初代会長である中西悟堂が1934(昭和9)年に創立して以来、当会は全国に広がる連携団体(支部)(以下、支部)というや会員、支援者に支えられ、また、他の団体、企業、行政と力をあわせて、「野鳥も人も地球のなかま」を合言葉に、人と自然が共存する未来を目指して活動してまいりました。ご支援、ご協力いただいたたくさんの方々に、心よりお礼申し上げます。

2025年度も全国85の支部と協働しながら、野鳥を中心とした生物多様性の保全活動や政策提言、野鳥や自然を愛する活動を広げるための普及活動等に取り組みことができました。以下に、その成果を報告します。

自然保護事業

絶滅のおそれのある種の保護については、タンチョウ(湿原)、シマフクロウ(森林)、カムリリウミスズメ(海洋)、チュウヒ(原野)を取り上げ、各種の減に向けて実効性がある法制度を整備できるように関係団体とともに政府へ政策提言を行ったほか、IUCNの世界自然保護会議に参加して、「人間の健康、生物多様性、自然環境を守るために、プラスチック汚染に終止符を打つための行動を推進する」動議を提案し、採択されました。

市民科学としての野鳥観察の促進とデータの活用を進めるためにコーネル大学と共同で運営している「eBird Japan」については、参加者拡大のために愛鳥週間やバードウォッチングウィーク、Global Big Dayに、キャンペーンやイベントを行うとともに、11月8日には同大学の研究員の来日に合わせて、ワークショップ「eBirdのデータ解析と保全・科学研究への活用」を開催しました。こうした普及活動を通じて、eBirdの国内の利用者は1万2千人に達しました。

普及事業

野鳥や自然の素晴らしさやその大切さを広める普及活動は、自然保護活動とともに重要な活動です。その活動の中心は、全国各地の支部によって開催されている探鳥会です。今年度の全国の探鳥会の年間参加者は昨年度よりも増えて約7万人になり、ほぼコロナ禍前の水準に戻りました。なお、その探鳥会のリーダー養成に活用する「探鳥会リーダー養成テキスト」を発行しました。今後は、このテキストを活用して、リーダー育成を推進・支援していく予定です。

ツバメを題材とした人と野鳥が共存する社会づくりを提案する事業では、ねぐらマップのオンライン化や新パンフレット「おやすみツバメ」を発行。加えて、ツバメの巣を見守る20都府県の32の企業・団体に対して感謝状を贈呈しました。この模様は全国

26のメディアで報道され、当会のPRにも貢献しました。

新規パンフレット「超独断!バードウォッチングカレンダー」をはじめ、野鳥に関する小冊子を3万5千部配布するとともに、野生動物との関わり方について考える「野鳥の子育て応援(ヒナを拾わないで!)」キャンペーンを、日本鳥類保護連盟や野生動物救護獣医師協会とともに継続し、ポスターを11万枚制作して全国に配布しました。

また、近年ではオンラインイベントも人気があり、財団主催で開催した25回の講座には、年間で約2万5千人が参加されました。

財政

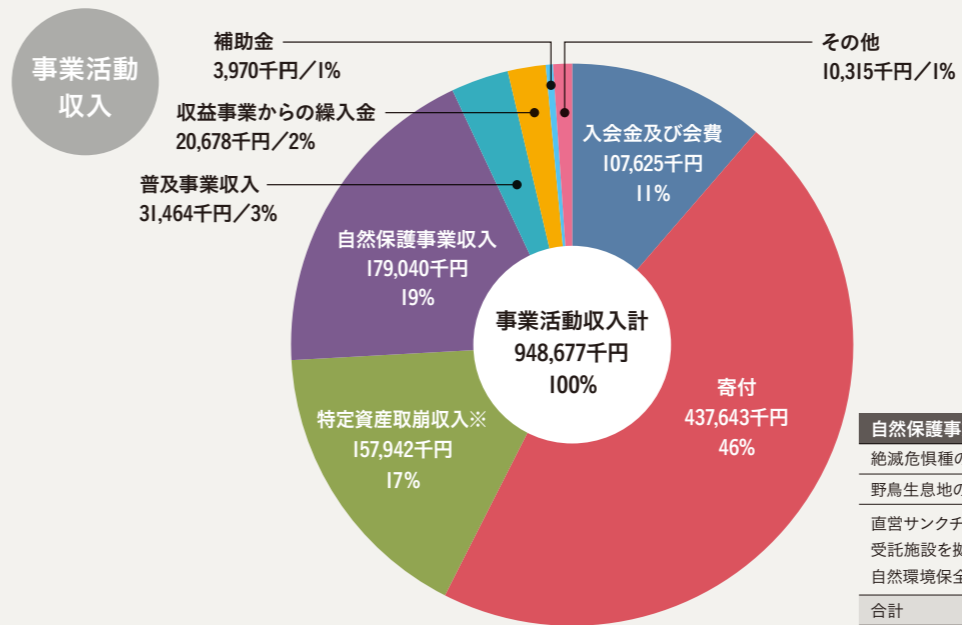
当会は国や地方自治体からの補助金等に依存せず、運営財源を会費や寄付金、受託事業や収益事業として行う物販事業による収入によってまかなっているNGO(非政府組織)です。

下図に示すように、2025年度について年間約6億6千万円規模の自然保護及び普及事業といった公益的な活動を行いました。これらの活動費は、①入会金及び会費、②寄付及び寄付を特定資産化した資産の取崩収入、③受託収入等の自然保護・普及事業収入、④収益事業からの繰入金、の4つのおもな財源からまかなっています。

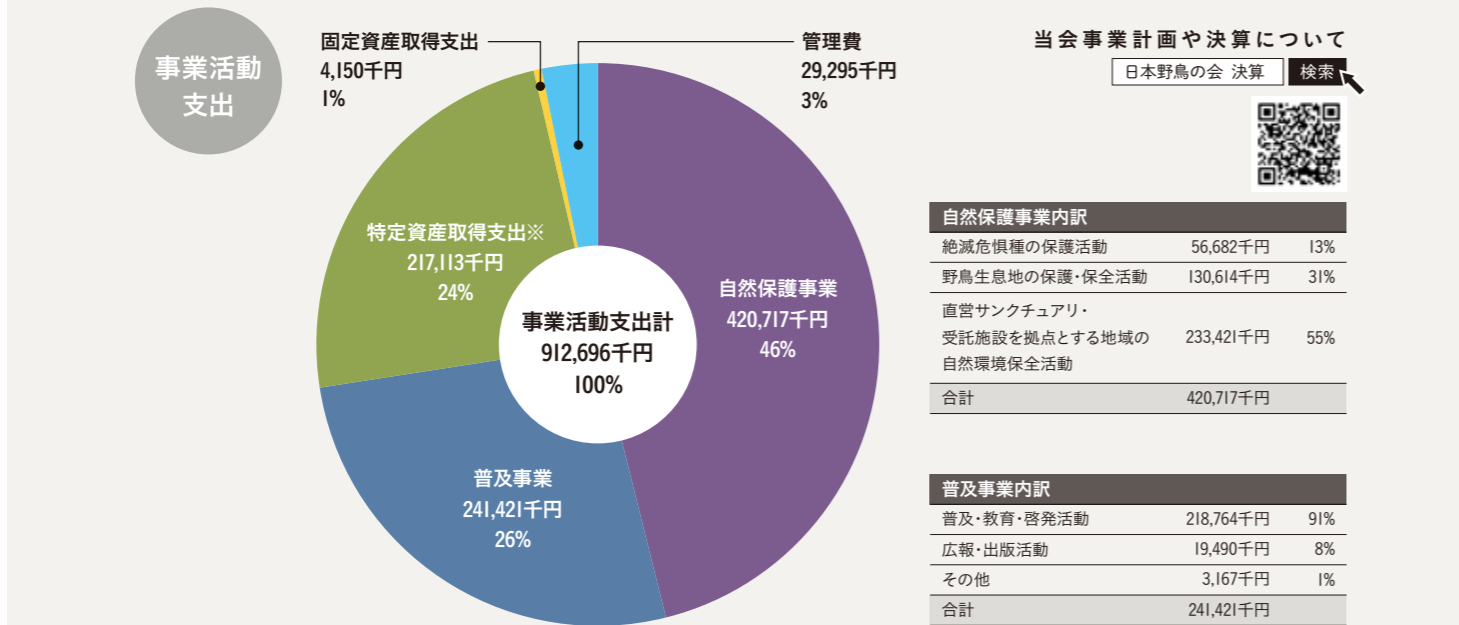
2025年度は、会員からの会費が約1億8百万円、支援者からいただいたご遺贈やご寄付は約4億3千8百万円にのびりました。収益事業からの繰入金も2千1百万円となり、それぞれの収入が当会の公益的な活動を支える大きな財源となっております。今後、こうした皆さまからの負託に応えられるよう、野鳥を通して自然に親しみ自然を守る運動を推進してまいります。引きつづきご支援いただきませう、よろしく願っています。

2025年度 決算のご報告

この決算報告では、当会の「公益活動に関する決算数値」を、支援者の皆さまにわかりやすいよう、一部集計し直しております。公益法人会計基準に従った財務諸表等は、当会HPをご覧ください。



2025(令和7)年度決算の事業活動収入合計額は、9億4,868万円でした。入会金及び会費は前年度比で微減、ご遺贈や大口寄付を含むご寄付による支援を沢山いただきました。また当会収入を物品購入で支えていただく方も多く、収益事業による公益事業繰入金が2,000万円を超えました。
※特定資産取崩収入は、特定の目的のための積立資産(主に過年度のご寄付)を、目的に沿って支出するために取り崩したものです。



事業活動支出の合計額は、9億1,270万円でした。希少種やその生息地を守る自然保護活動、各施設やオンラインも活用した普及活動等を継続的に展開いたしました。今年度いただいた多額のご寄付の一部は、次年度以降の資産として積み立てております。
※特定資産取得支出は、次年度以降特定の目的のために使用する資産を積み立てたものです。

当会事業計画や決算について
日本野鳥の会 決算 検索

項目	金額(千円)	割合
絶滅危惧種の保護活動	56,682	13%
野鳥生息地の保護・保全活動	130,614	31%
直営サンクチュアリ・受託施設を拠点とする地域の自然環境保全活動	233,421	55%
合計	420,717	

項目	金額(千円)	割合
普及・教育・啓発活動	218,764	91%
広報・出版活動	19,490	8%
その他	3,167	1%
合計	241,421	

事業報告
2025(令和7)年度

Topics!

自然保護事業

● 自然エネルギー対策事業



風力発電施設による「障壁影響調査」のようす

2025年度も、2023年度から継続して、北海道北部に建設された複数の風力発電施設で、ガン・ハクチョウ類、海ワシ類の鳥類が渡り時に風車を避けて飛ぶ、「障壁影響調査」を春(3・4月)と秋(10・11月)に実施しました。また、オジロワシやオオワシの衝突死が頻発する北海道北部の浜里ウインドファームを運営する事業者に対して、協議会を立ち上げて専門家等と協議のうえより厳しい保全措置を講ずることを求めました。

● チュウヒ保護プロジェクト



英国王立鳥類保護協会などが運営する野鳥保護区を訪問

6月に英国王立鳥類保護協会(RSPB)などが運営する野鳥保護区ほか10か所を訪問し、チュウヒの近縁種であるヨーロッパチュウヒの繁殖環境の創出方法を学びました。湿地環境を維持していくこと、そのためには保護区内の土壌水分管理が重要なこと、定期的なヨシ刈り、家畜の放牧による植生管理や捕食動物対策の必要性などについて、多くのことを学びました。勇払原野で計画されていた風力発電事業は、8月に中止の発表がありました。本計画地には、チュウヒをはじめとする希少鳥類の重要な繁殖地が残っており、当会は、計画発表当初から地

● ツル越冬地分散事業

気候変動対策や2024年度に発生したコメ不足などのため、農業政策が大きく変わりつつあります。ツル類は収穫後の水田で越冬するの、その影響を受けることが予想され、対策を検討するための調査や行政への働きかけを行いました。また、愛媛県西予市や熊本県玉名市での地域の取り組みに参画しました。

● 重要生態系監視地域 モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)

2025年度は第5期(2023~2027年)の3年目にあたり、コアサイトでは繁殖期19か所、越冬期12か所、準コアサイトでは繁殖期7か所、越冬期5か所、一般サイトでは繁殖期77か所、越冬期53か所を調査を実施しました。コアサイトの与那サイト(沖縄県)で越冬期のホントウアカヒゲの個体数が減少していること、一般サイトでは、越冬期の森林環境でアオジの減少傾向が確認されました。また、調査結果の発表と普及、調査員獲得のため、日本鳥学会2025年度大会で自由集会とポスター発表を行いました。そのほかに、新しい調査員の確保と調査員の交流、情報交換を目的に調査研修・交流会を現地で1回、オンラインで1回行いました。

● eBirdの運営と利用促進

世界最大の市民科学プロジェクトeBirdの日本語版を運営し、eBirdへの参加とデータの活用でオーストンウミツバメの汚染状況を明らかにしたほか、それをもとに政策提言活動などに活かしました。

● タンチョウ保護事業

2026年3月に、タンチョウのレッドリストのランクが準絶滅危惧(NT)に下がり、「絶滅危惧種」ではなくなりました。個体数が回復し、生息域も拡大してきたため、今回の評価に至りました。絶滅したと考えられていた野鳥がここまで回復できたのは、地域の方から始まり、行政、当会や他団体による保護活動、そして支援者の皆さんの応援があつてこそです。

● カムリウミスズメ保護事業

カムリウミスズメの繁殖地である神子元島(静岡県)と鳥帽子島(福岡県)で、人工巢の設置と利用確認調査を行いました。両島で人工巢を使った繁殖が確認されました。神子元島では約半数の巣箱が利用されるようになり、繁殖個体数の増加が示唆されました。繁殖地周辺の利用状況を明らかにするために、GPSロガーをカムリウミスズメに装着する調査を神子元島で行いました。そのほか、都立東京港野鳥公園での世界アルバトロスターの展示に海鳥をテーマとしたポスターを提供しました。



(右) IUCNの世界自然保護会議での交渉のようす。動議を提出し、採択された

(左) 根室市春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターでは、根室市地域おこし協力隊主催の海洋プラスチックに関する企画展に、展示物や情報提供で協力

● 海洋プラスチック対策事業

プラスチック汚染の問題を多くの方に知ってもらうため、オンラインセミナーを3回開催し、アーカイブ視聴を含め1500名の参加がありました。また、海の日にあわせて、映画「マイクログラスチック・ストーリー」の配信と上映会を行い、オンライン配信577名、都立東京港野鳥公園での上映会に27名、佐竹監督の座談会には親子を中心に30組の参加がありました。そのほか、各サンクチュアリでの展示や、ごみ拾いと野鳥観察を合わせた「クリーンアップ探鳥会」を財団主催および支部に呼びかけて実施しました。

政策提言では、プラスチック条約の政府間交渉委員会に向けて政府と意見交換を行ったほか、国際自然保護連合(IUCN)の世界自然保護会議では、プラスチック汚染への行動を呼びかける動議(動議059「人間の健康、生物多様性、自然環境を守るために、プラスチック汚染に終止符を打つための行動を推進する」)を提出し、採択されました。そのほか、大学との共同研究



カムリウミスズメの人工巣を設置(鳥帽子島は長崎大学、北九州市立いのちのたび博物館と共同で実施)



学生ボランティアと冬期自然採食地を整備するようす



ワークショップ「世界最大の市民科学プロジェクトeBirdのデータ解析と、保全・科学研究への活用」のようす



重要生態系監視地域モニタリング推進事業の現地での調査研修会のようす



「超独断!バードウォッチングカレンダー」。年間を通じたバードウォッチングの楽しみ方や見どころを紹介したパンフレット

日本野鳥の会佐賀県支部の推薦により、ツバメを見守る「玄海みらい学園」(佐賀県)に感謝状を贈呈



日本には多様な自然があり、四季折々のさまざまな野鳥に出会えます。地域や季節で見どころが変わることも、バードウォッチングの魅力です。特定の場所や季節に見られる鳥、数千・数万羽の鳥が飛び交うダイナミックな風景など、紹介したいポイントがたくさんあります。このような季節ごとのバードウォッチングの楽しみ

● **「超独断!バードウォッチングカレンダー」を発行**

野鳥や自然への関心を深める機会の提供に努めていきます。

● **野鳥に関するオンラインイベントを開催**

全国の会員や支援者の方、野鳥に興味を持つ方を対象に、さまざまなオンラインイベントを開催しています。2025年度は「会員支援者オンラインセミナー」や「オンライン探鳥会」、「初心者のための安西さんのオンライン野鳥講座」など、年25回のイベントを開催し、約2万5000人の方が視聴しました。今後も、さまざまなプログラムを通じて、より多くの方にバードウォッチングを楽しんでいただくために、野鳥や自然への関心を深める機会の提供に努めていきます。

● **ツバメの子育てを見守る団体へ感謝状を贈呈**

ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターでは、地域の方々にサポーターとして、イベント運営や調査、環境管理など多岐にわたる

● **探鳥会リーダー養成テキストの発行と研修会の開催**

コロナ禍以降、各地の支部から探鳥会の担い手(リーダー)不足に悩む声が寄せられるようになり、財団としてもリーダー養成の取り組みを進めています。その一環として、支部の有志とワーキンググループを作って議論し、探鳥会の意義やリーダーの役割など探鳥会運営に必要な情報をまとめた『探鳥会リーダー養成テキスト』を発行しました。また、2月にはこのテキストを用いた研修会も開催しました。今後も支部と連携し、各地で研修会を開催する予定です。

● **『フィールドガイド日本の野鳥』日本鳥類目録改訂第8版準拠版を発行**

長年、広く活用されている『フィールドガイド日本の野鳥』について、日本鳥類目録改訂第8版に準拠させるため、分類や学名の改訂を行いました。新しく種として追加されたものもありますが、スペースの都合で文字のみの追加に留め、図版の追加はしていません。一方、巻末リストは日本鳥類目録改訂第8版に準拠し、絶滅危惧種等の情報は2026年1月1日現在の情報に更新していきます。今後も増刷のたびに、更新できる情報は改訂する予定です。

事業報告
2025(令和7)年度



『フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂新版』



『探鳥会リーダー養成テキスト』



日本製紙株式会社と実施した魚類調査のようす。豊富なエサ資源を確認

設置した水場を使うアカコッコ



シマフクロウのエサ資源不足を補うため、2025年度は日高地域の当会野鳥保護区内に設置したいけすへ、4か月間で計120kgのヤマメを給餌しました。また、日本製紙株式会社との協定にもとづく根室地域の野鳥保護区では、3つがいの縄張り内にある河川において、夏と秋の2回、同社と共同で魚類密度調査を実施し、エサ資源量の把握に努めました。さらに、釧路地域の野鳥保護区では、シマフクロウが好む豊かな森を再生するため、カラマツ林を針広混交林化する間伐施業を17haで実施しました。当会は引き続き、生息環境のモニタリングと整備の両面から、本種の保護活動を推進していきます。

● **風蓮湖・春国岱ラムサール条約湿地登録20周年行事に協力**

当会レンジャーが常駐する根室市春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターがある春国岱・風蓮湖が、ラムサール条約湿地登録20周年を迎えました。それを記念して市民団体「根室ワイズユースの会」が主催する記念行事が行われ、レンジャーは春国岱ガイドツアーの案内や今昔写真展への写真提供等に協力しました。

T! 普及事業

● **ツバメの子育てを見守る団体へ感謝状を贈呈**

日本では古くから「ツバメが巣を作ると縁起が良い」と言われ、商売繁盛のシンボルや害虫

ご支援をいただいています。2025年9月には、札幌で開催された「日本鳥学会2025」にサポーターの小・中・高校生たちが参加。毎月行っている森林・草原・湿原でのスポットセンサス調査の結果を、約40年前の調査データと比較して発表し、参加者の方々に温かな声援をいただきました。また、ウトナイ湖を除き、勇払原野はまだラムサール条約のような環境保全の枠組みに入っていないのが現状です。その勇払原野の自然環境を守るために、美々川での定期的な水質調査をサポーターの方々と実施しました。これからも地域の方々を合わせ、貴重な自然を次世代へつないでいきます。



風蓮湖・春国岱ラムサール条約湿地登録20周年行事でレクチャーをするレンジャー

次代を担うウトナイ湖サポーター



昨年度もたくさんの個人・法人の皆さまから、ご寄付や協賛をはじめ、物資のご提供、ボランティア活動などさまざまなご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。(敬称略・五十音順)

個人の方からのご支援

■おもなご寄付	金額(円)	
一般ご寄付	36,210,869	会費・通販代金支払い時に加えて振り込んでいただいた寄付金などを含む
募金箱へのご寄付	434,036	
バードメイト、ブローチ等を通してのご寄付	62,007,374	
生涯会員のご寄付	11,180,000	
タンチョウふぁんクラブ賛助会費	3,060,000	
鶴居サンクチュアリ募金箱他へのご寄付	310,065	
ウトナイ湖ファンクラブ賛助会費	920,000	
ウトナイ湖サンクチュアリ募金箱他へのご寄付	439,816	
<small>(企業との提携によるご寄付)</small>		
「野鳥と緑の信託」を通じたご寄附	1,590,492	三菱UFJ信託銀行に信託された財産の収益金のご寄附
「日本野鳥の会カード」を通じたご寄付	8,246,269	オリエントコーポレーションからクレジットカードご利用金額の0.5%と、利用者からのお申し出によるポイントのご寄付

■個人からのご寄付(のべ件数)		
10万円以上	101件	生涯会員寄付を除く
100万円以上	24件	遺贈・相続財産寄付を含む

■個人との協定による野鳥保護区設置へのご協力	
永野貴浩氏	
石澤元勝氏	

法人・団体からのご支援 (五十音順・敬称略)

■法人・団体からのご寄付(10万円以上)、物資提供、協賛、技術支援、野鳥保護区管理などへのご支援	
旭山動物園	(株)バリューブックス
インクカートリッジ里帰りプロジェクト	富士通(株)
(特非)SOS総合相談グループ	堀井芙蓉苫小牧朗読実行委員会
(株)佐々木建設	NPO法人北海道シマフクロウの会
(株)ササキ工芸	三菱電機(株)
(一社)炭素会計アドバイザー協会	三菱UFJ信託銀行(株)
(株)ツルヤ	三菱UFJニコス(株)
東京システムズ(株)	(株)もりもと
日航スチュワーデスOG会	モンベルクラブ
日本製紙(株)	八ヶ岳倶楽部

■ボランティア	
野鳥生息地の環境整備活動など、ボランティアでのご支援	
アイシン北海道(株)	
勇建設(株)	
日本航空(株)	
(一社)日本旅行業協会	
鶴居村タンチョウ愛護会	
フィールド・アシスタント・ネットワーク	
ヨコハマタイヤリトレッド(株) 北海道事業所	
ボランティアサークル「ゆのみ」	
苫小牧ハスカップライオンズクラブ	
明治安田生命保険(相)	

■調査・イベント開催	
調査や一般の方に向けたイベント開催への協賛や物資提供などのご支援	
カールツァイス(株)	明治ホールディングス(株)
(株)キングジム	山崎製パン(株)
興和オプトロニクス(株)	
サントリーホールディングス(株)	
(株)ニコンイメージングジャパン	
(株)ニコンビジョン	
(株)ニチモク林産北海道	
日軽金アクト(株)	
日本軽金属(株)	
日本製紙(株)	
(株)不二家	

■小冊子制作	
一般の方へ配布する小冊子制作への協賛や用紙提供などのご支援	
株木建設(株)	三菱製紙(株)
(株)キングジム	山崎製パン(株)
東亜建設工業(株)	横浜ゴム(株)
丸和油脂(株)	

■募金箱設置	
募金箱設置へのご協力	
個人	41件
法人	57件
下記法人さまには、複数の店舗に募金箱を設置していただいています。	
(株)モンベル	

■「野鳥の子育て応援(ヒナを拾わないで)」キャンペーン2025年 ご協賛	
(株)アシスト わんわん倶楽部/アトム(株)/カールツァイス(株)/学研グループ/株木建設(株)/カラータ(株)/(株)キングジム/サントリーホールディングス(株) 神宮司庁/東亜建設工業(株)/(株)ニコンイメージングジャパン/(株)日本フードエコロジーセンター/日本野鳥の会茨城県/(株)フジナガ/(公財)ホシザキグリーン財団 丸和油脂(株)/三菱製紙(株)/(株)メール/モリトジャパン(株)/(株)モンベル/八ヶ岳倶楽部/横浜ゴム(株)/リコーリース(株)/リズム(株)	

■eBird Japan ご協賛	
カールツァイス(株)/サントリーホールディングス(株)	

■各種助成金	
サロベツ原野におけるチュウヒ・サンカノゴイの繁殖状況調査費用の一部	公益信託 経団連自然保護基金
カムリウミスズメ用GPSロガーの購入費の一部	一般社団法人 昭和会館
野外鳥類学論文集『Strix』の発行費用の一部	一般社団法人 霞会館
ウトナイ湖サンクチュアリネイチャーセンターサポーター活動費	公益財団法人 北海道環境財団

事業報告
2025(令和7)年度

B

力強いご支援を、ありがとうございます!

鳥にも人にも優しい社会をめざす仲間が、日本野鳥の会の活動を支えています。昨年度もたくさんの個人・法人の皆さまから、ご寄付や協賛をはじめ、物資のご提供、ボランティア活動など、さまざまなご支援をいただきました。ご寄付の総額は、4億3,764万2,682円にのびります。心より感謝申し上げます。

ご寄付へのお礼として、

野鳥の応援団「バードメイト」のピンバッジをはじめ、オリジナルの野鳥グッズをご希望の方へプレゼントしています。2025年度のモチーフは、オンラインで開催した鳥類644種総選挙「バードメイト杯」で一位だった、スズメでした。



バードメイトのピンバッジ「スズメ」

皆さまの応援で「バードメイト」の輪が大きく広がっています



日本野鳥の会愛知県支部 支部長
日本野鳥の会 監事
新實 豊氏

支部から新バードメイトへの応援コメント

愛知県支部では5月～8月に東名阪自動車道蟹江ICサギコロニーのモニタリング調査を行っています(詳しくは会誌『野鳥』2026年3・4号を参照)。最大5千羽近い数になりますので、サギは私たちにとってなじみのある鳥です。中でもアオサギは1月頃から木のでっぺんを陣取って存在感を放っています。アオサギって目や足を見ると恐竜のようでちょっと怖いですね。そんなアオサギがとても愛らしいバードメイトピンバッジになりました。サギ好きにはたまらない一品です。このバッジを着けてサギ調査に行ったらせん望のまなざしを浴びること間違いなしです。皆さんもぜひどうぞ。

2026年度のバードメイトは「アオサギ」です!



特集
「気づいてほしい、サギたちの命の営み」
はこちら▶



法人特別会員

当会の活動をおもに資金面でご支援いただいています。

2026年6月1日現在、92社 ●五十音順。 株式会社は(株)、有限会社は(有)などと略記 ●凡例 50年 会員継続50年以上 40年 会員継続40～49年 30年 会員継続30～39年 20年 会員継続20～29年 10年 会員継続10～19年 5年 会員継続5～9年 新 会員継続5年未満 2025年7月以降新規入会	(株)ケンコー・トキナー	5年	日本製紙(株)	40年	
	興和オプトロニクス(株)	30年	(公社)日本ナショナル・トラスト協会	20年	
	(公社)国土緑化推進機構	10年	ニューウェルブランズ・ジャパン合同会社コールマン事業部	10年	
	サントリーホールディングス(株)	50年	農林中央金庫	30年	
	(株)シモン	20年	司法書士法人野崎合同事務所	10年	
	(株)小学館	40年	野村ホールディングス(株)	50年	
	(株)湘南カントリークラブ	10年	ハクバ写真産業(株)		
	神宮司庁	20年	(株)はな		
	(株)シンサナミ	30年	(株)阪急交通社	30年	
	アーク循環器クリニック	10年	新日本印刷(株)	5年	(医社)翡翠会 上平内科クリニック
(株)アイシン	10年	住商フーズ(株)	10年	(有)フィールドワーク	5年
(株)アシスト わんわん倶楽部	20年	住友化学(株)	40年	(医)福重会 レディースクリニック しげまつ	5年
アトム(株)	10年	(株)Swallow Design Studio		富士通(株)	10年
(株)R.project	5年	宗教法人「生長の家」	10年	(株)フジナガ	10年
(株)いちテック	新	ソニーマーケティング(株)	5年	(株)不二家	5年
(株)植松商会		大同特殊鋼(株)	10年	幌延風力発電(株)	新
(株)エス・ビーバック	10年	(株)タキ・リビング		ポストリア(株)	20年
NCD(株)	5年	(株)田代コンサルティング		丸和油脂(株)	10年
MS&ADインシュアランス グループ ホールディングス(株)	40年	(有)大洋商事	5年	三菱製紙(株)	20年
OMデジタルソリューションズ(株)	5年	中国電力(株)	40年	三菱電機(株)	
小川珈琲(株)	10年	中電環境テクノス(株)	10年	三菱UFJ信託銀行(株)	40年
奥霧島温泉郷(株) [協定旅館]		(株)テクノ中部	20年	光村印刷(株)	20年
(株)オリエントコーポレーション	30年	電源開発(株)	30年	ミレー・マウンテン・グループ・ジャパン(株)	
カールツァイス(株)	40年	東京システムズ(株)	20年	明治ホールディングス(株)	10年
花王(株)	30年	(株)東光	10年	名鉄観光サービス(株)	新
株木建設(株)	50年	東洋証券(株)	新	(株)メール	10年
(株)カメラのキタムラ	10年	苫小牧漁業協同組合	30年	モリトジャパン(株)	5年
カラータ(株)	30年	苫小牧港開発(株)	40年	(有)八ヶ岳ブランニング(八ヶ岳倶楽部)	20年
(株)かんぼ生命保険		トヨタ自動車(株)	20年	山崎製パン(株)	10年
キャノン(株)	30年	トヨタ紡織(株)		横浜ゴム(株)	10年
(株)キャメル珈琲	5年	とりす工法研究会	10年	(医社)和敬会 みきやまりハビリテーション病院	10年
(株)キュービック・アイ	10年	中江産業(株)	30年		
極東鋼弦コンクリート振興(株)	10年	(株)新潟システムソリューション	5年		
(株)キングジム	20年	(株)ニコンイメージングジャパン	40年		
京浜急行電鉄(株)	40年	(株)日清製粉グループ本社	40年		